

たじびのたより

No.20

特集
江戸時代の丹南と高木氏



高木正次

永禄六年、緒川に生る。天正十年めされて東照宮につかへたてまつり、十二年長久手の役に供奉し、敵とくみうちして高名をあらはす。十八年小田原御陣のときもしたがひたてまつる。このとし関東にいらせたまひ、武蔵国荏原郡のうちにをいて采地千石を賜ひ、十九年陸奥国九戸御陣のときハ岩手澤まで扈従し、文禄元年肥前国名護屋に御進発のときもしたがひたてまつり、三年家を継、さきにたまひし千石の地を弟善三郎守次にあたふ。慶長五年、台徳院殿宇都宮より御旗をかへされ、真田昌幸が籠れる信濃国上田城をせめたまふのときも扈従し、七年下総国のうちにをいて二千石を加へられ、十年四月従五位下主水正に叙任す。十二年大番の頭となり、十九年大坂御陣のとき、仰によりて江戸にとゞまり、隊下の士を率ゐて本城を守衛す。元和元年の役にハしたがひたてまつり、五月七日の合戦に御旗下にありて先登し、隊下の士を指揮して勇功をはげます。三年近江国のうちにをいて新恩二千石を賜ふ。九年、大猷院殿洛にのぼらせたまふのとき、したがひたてまつる。このとし大坂の定番となり、千石を加増ありて領地をうつされ、河内国丹南のうちにをいてすべて一万石を領し、丹南を居所とす。寛永七年十一月晦日かの地にをいて卒す。年六十八。豊誉浄照智光院と号す。領地丹南村の来迎寺に葬る。

『寛政重修諸家譜 第七十六冊』
国立国会図書館デジタルアーカイブより翻刻

丹南藩の藩主高木氏

表紙の人物は丹南藩初代藩主の高木主水正次(1563~1630)で、後世の絵師が描いた掛軸が丹南の来迎寺に伝えられています。彼は、徳川十六将の一人に数えられる高木清秀の三男で、江戸幕府が編さんした大名・旗本の家系図である「寛政重修諸家譜」に生涯が記されています。それによると、元和9年(1623)に大坂城の京橋口と玉造口を警護する大坂定番となったことを機に、領地を加増されるとともに全ての領地を河内国丹南郡に移されました。そして、石高1万石の譜代大名となり、丹南郡丹南村(現、松原市丹南)に陣屋を築いて支配拠点としました。それ以来、約250年にわたり高木氏が藩を治めましたが、明治4年(1871)7月の廃藩置県により藩領は丹南県となり、13代正善が最後の藩主となりました。

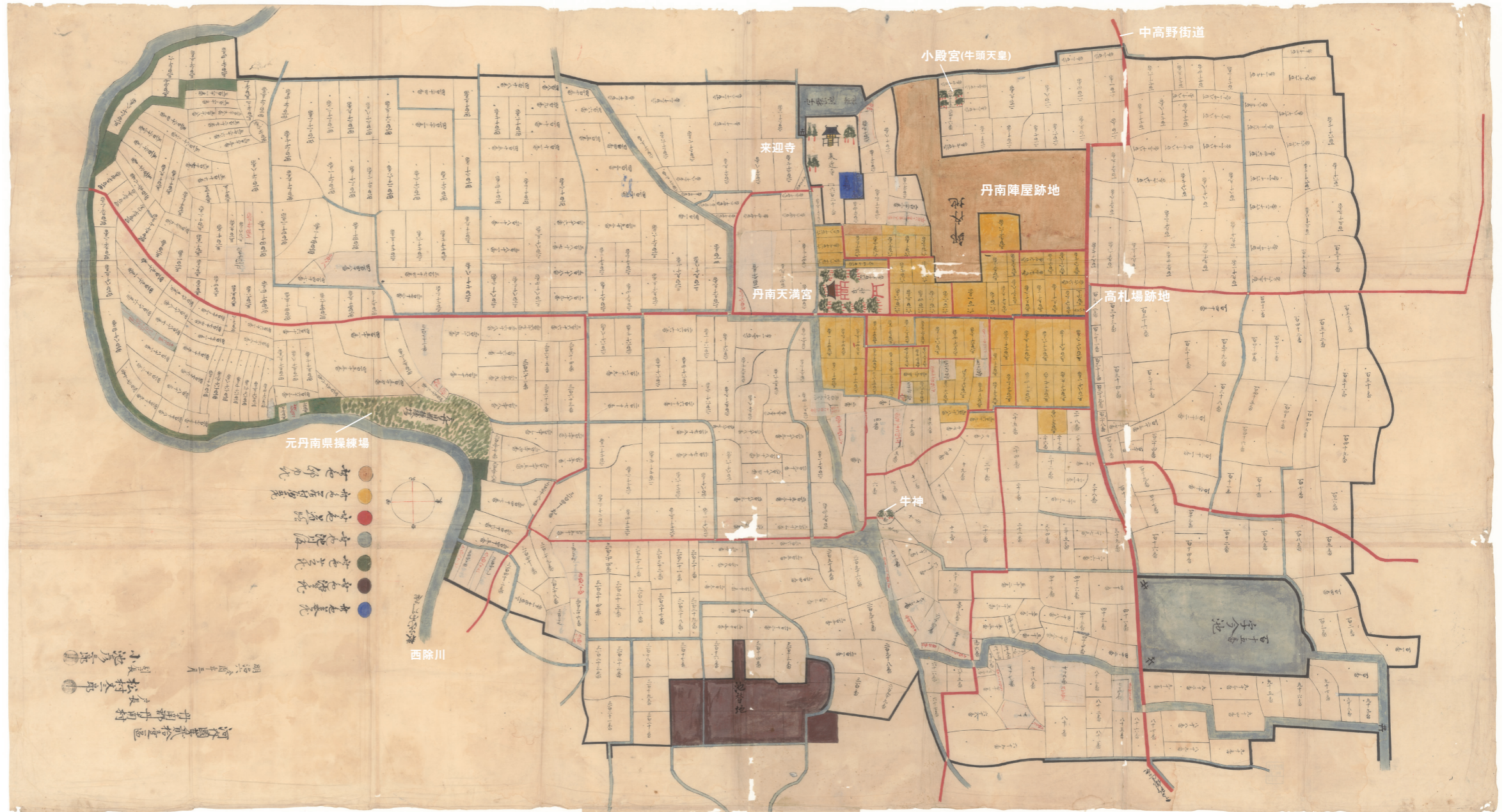
藩主が本拠とした丹南陣屋ですが、正陳が6代藩主をつとめた元禄年間(1688~1703)より後は参勤交代を行わず江戸に住まう定府となったため、以後は藩主不在となりました。陣屋にどのような建物が存在したかは不明ですが、現地支配の拠点として藩の役人が利用していたことが、来迎寺の古文書から明らかになってきました。

丹南村の歴史

現在の松原市丹南は、江戸時代には河内国丹南郡丹南村と呼ばれました。右の地図は約150年前の明治時代始め頃に作られたものですが、描かれた村の様子は江戸時代もほぼ変わりがありません。同時期に堺県に提出された「一村限取調帳」によると、95軒の家が建ち並ぶ人口429人の農村であったことがわかります。また、村内には元丹南藩士とその家族324人が居住する住居も80軒存在したようです。

10世紀成立の『和名抄』によると、現在の松原市を含む一帯は河内国丹比郡と呼ばれました。11世紀後半に丹北・丹南・八上の3郡に分けられた後は、明治時代まで境界がほぼ変わらなかったようです。丹南郡の範囲は、現在の松原市丹南と大阪狭山市、そして堺市美原区と東区の大部分、羽曳野市・藤井寺市の各一部です。当時の郡は郷というさらに小さい単位に分けられており、室町時代の史料では丹南郷の名前も確認できます。

丹南の地は竹内街道と中高野街道が交わる交通の要



丹南村地籍図 個人所蔵
寸法：94.8cm×172.5cm、貼り足し部20.6cm×73.0cm
彩色：7色 製作年：明治6年(1873)3月

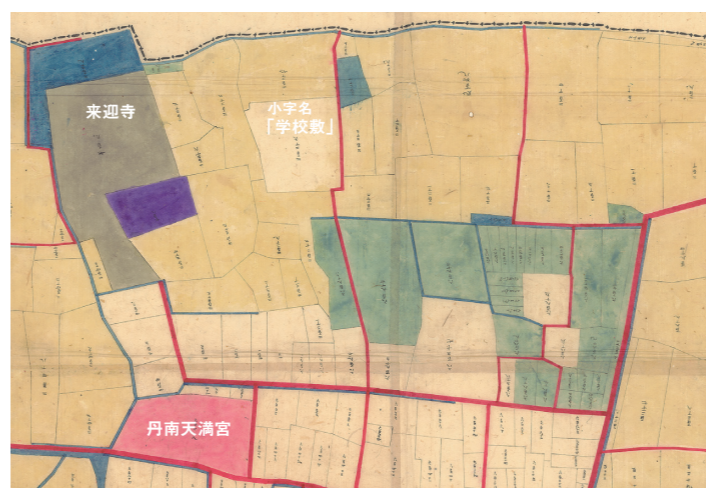
丹南村が、堺県の河内国第21区に属していた明治6年(1873)に製作された地籍図です。明治時代には土地の自由な所有が認められ、土地の収益を基に決められた地価に応じた税金を納める仕組みが整えられます。そのため、土地の持ち主・使い方・面積などの記録が必要となり、様々な地図が作成され始めます。本図もそのうちのひとつで、江戸時代以来の測量法で作られたものです。

衝であったため、鎌倉時代末期には河内国守護所が置かれ、元弘3年(1333)に楠木正成がここを攻め落とした記録も残っています。また、丹南郡では鎌倉時代の12世紀以降には、鋳型に金属を溶かした湯を流し込み鍋・釜や梵鐘などの鋳物を作る技術が盛んでした。この技術を駆使する集団は河内鋳物師と呼ばれ、丹南遺跡、真福寺遺跡(堺市美原区)、余部日置荘遺跡(堺市東区)などで鋳物作りの痕跡が発掘されています。河内鋳物師たちは南北朝時代になると日本各地へ移住し始め、やがて丹南郡からは鋳物師の姿が消えてしまいました。



地籍図には土地の境界線が墨で描かれ、土地1筆ごとに異なる地番が記されています。土地の使い方により色が塗り分けられており、記された凡例からそれぞれ墓地・池替地・芝地・池川溝・道路・居村屋敷地・邸内地であるとわかります。色が塗られていない土地は水田と畑地です。社寺や祠のある土地にも色は塗られていませんが、建物と樹木が描かれており来迎寺と丹南天満宮(図中の「氏神」)のみ名前が記されています。

本図には、製作年の下に責任者として区の戸長と副戸長の名が記されています。明治時代になり身分に関係なく朱印が使えるようりましたが、印鑑はそれまでどおり墨で押されています(黒印)。



丹南村全図(部分) 個人所蔵
寸法：131.2cm×199.1cm 彩色：9色
製作年：明治16年(1883)12月

上の地籍図から10年後に製作された地図です。掲載した部分は上の図で「邸内地」と記された丹南陣屋の周辺で、上が北です。上の図と配色が異なり、水田が黄色で畑地が緑色です。家屋などが建つ土地は色を塗らず、地番のみが記されています。

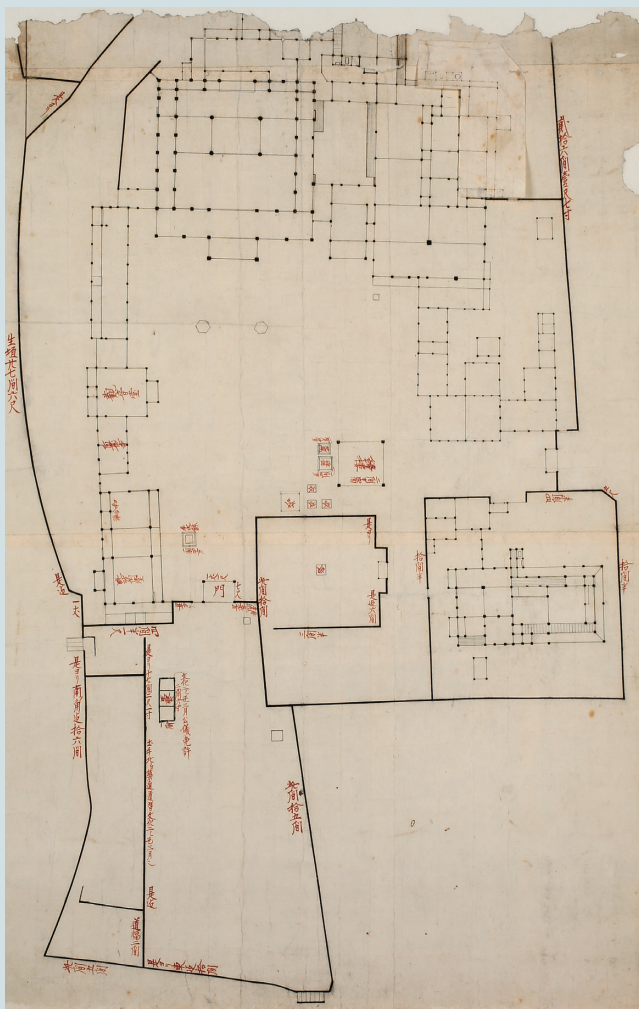
村の家屋や丹南天満宮境内(648番)・来迎寺境内(709番)は変化がなく、陣屋の跡地が田畑などに変わったことがわかります。来迎寺の東側にある水田に囲われた土地(226番)は「学校敷」という小字名で、明治元年(1868)には丹南藩の藩校「丹南学校」が置かれました。廃藩後は堺県の郷学校出張所が置かれ、後に河内国第29番小学が置かれました。その後、制度改正により改称した後に明治22年(1889)4月には丹南尋常小学校へと改称し、明治40年(1907)には丹南郡真福寺村へと移転しました。

丹南藩主高木氏と来迎寺

丹南に所在する来迎寺は、平野の大念佛寺を本山とする融通念佛宗の中本山格寺院です。融通念佛宗中興で第7世の法明(1279～1349)が十箇郷別時と呼ばれる融通念仏を信仰する集団を組織したことが始まりです。この集団はいくつかの村の信者が集まったもの(講中)で、本尊などを祀る辻本道場と呼ばれる拠点を数年ごとに籤で決めた村に移していました(挽道場)。

来迎寺は、高木氏から境内地を与えられて以降、丹南村を本拠地とし、承応2年(1653)の本堂建立を始め境内の整備を進めました。また、江戸時代を通じて丹南藩との関係を深め菩提寺となったため、来迎寺には丹南藩や高木氏に関する様々な品が今に伝えられています。

近年、(公財)元興寺文化財研究所とともに来迎寺の文化財を調査したことで、丹南を含む南河内の歴史の一端が明らかになりました。詳しくは『松原市内所在の文化財総合調査』1・2の報告書をご覧ください。



文化3年(1806)～文政11年(1828)頃に制作された来迎寺の境内図。図の上が北で、丹南藩の初代藩主墓(廟所)は生垣に囲まれ、その東には藩主が墓所を詣る際に使用された御殿があったことがわかります。



真田信繁(幸村)所用と伝えられる六連銭文黒塗柄杓と手桶。



高木正次は、慶長20年(1615)の大坂夏の陣には徳川秀忠に従い出陣し、5月7日(旧暦)の天王寺・岡山の戦いで戦功を挙げました。これらは、その際に真田隊から分捕った戦利品とされます。丹南村には、大坂夏の陣で真田隊に村を焼かれた伝承が残っており、丹南の地を治めた高木氏が所持することには特別な意味があったのかもしれません。



丹南藩の初代藩主墓。土を盛った丘の上に高さ約2mの石造五輪塔が建ちます。元文年間(1736～41)までに建てられたことが古文書で分かっています。現在、来迎寺の墓地には初代正次と11代正明の墓石があります。また、菩提所である栖岸院(東京都)を始め、他に栄撰院(京都府)、叡福寺(大阪府)、高野山巴陵院(和歌山県)、妙源寺(愛知県)にも高木氏の墓所が存在します。



左/来迎寺本堂の左脇壇に安置された丹南藩主高木氏の歴代位牌。高木正次の父・清秀から歴代の位牌が並びます。寛保元年(1741)に亡くなった6代藩主正陳の法事を執り行うとともに、歴代藩主位牌を造立するよう命じられた記録が残されています。

右/初代藩主正次の位牌。唐破風造で表面には家紋と戒名、裏面には没年と代数を刻みます。代数は清秀を初祖(初代)と数えます。高さは69.3cmで、歴代全員の位牌はすべて同じ形をしています。